

修士論文（要旨）

2022年1月

定年後の社会参加が配偶者の主観的幸福感に与える影響  
—中国都市部の高齢者を対象として—

指導 杉澤 秀博 教授

老年学研究科

老年専攻

220J6006

趙 蘊霖

Master's Thesis(Abstract)  
January 2022

Influence of post-retirement social participation on spouse's subjective well-being:  
among older adults in urban China

Yunlin Zhao  
220J6006  
Master's Program in Gerontology  
Graduate School of Gerontology  
J. F. Oberlin University  
Thesis Supervisor: Hidehiro Sugisawa

## 目次

第1章	はじめに .....	1
第2章	これまでの研究と本稿の課題 .....	1
第3章	研究方法 .....	2
1.	対象と調査方法 .....	2
2.	分析項目 .....	3
3.	分析方法 .....	4
4.	倫理的配慮 .....	4
第4章	結果 .....	4
1.	対象者の属性 .....	4
2.	配偶者の在宅活動と外での活動が生活満足度に与える影響：重回帰分析の結果 .....	5
第5章	考察 .....	5
参考文献		
資料		

## 第1章 はじめに

近年、中国では、定年退職後にいかに生きるかが、高齢者にとって大きな問題となっている。定年退職後の生活を充実させるには、職域以外の社会参加が重要な意味をもつ。社会参加が参加する本人にだけでなく、配偶者に与える影響を視野に納めることが重要である。

## 第2章 これまでの研究と本稿の課題

筆者が調べた限りでは、男性高齢者の就業以外の社会参加が配偶者の主観的幸福感に与える効果を分析した研究は片桐・菅原によるもののみである[2]。中国では、このような研究はない。片桐らの研究以外では、高齢者の社会参加が夫婦満足度に与える影響を分析した研究[23]、さらに家事に限定したもの[25]であるが、高齢者の家事参加が配偶者の生活満足度に与える効果を分析した研究[5]がある。夫婦とも仕事と家事をすることが中国における一般化の問題であるが、男性だけでなく、女性も対象とし、高齢者の就業以外の社会参加がその配偶者の主観的幸福感に与える効果を分析した研究はない。

そこで本研究では、片桐・菅原の研究を参考にし、中国における定年後の夫の社会参加活動が妻の生活満足度に与える影響だけでなく、逆に妻の社会参加活動が夫の生活満足度に与える影響について分析することを目的とする。高齢期における社会参加の重要性を、高齢者本人だけでなく、配偶者に対するメリットの面からも提言できる。なお、本研究における社会参加活動は、家にいて個人とするような趣味活動や家事など、仕事に代わるあらゆる社会活動と定義する。

本研究の仮説は次の2つである。仮説1は、夫が非就業の場合就業者と比較して夫が社会活動が多いほど妻の生活満足度が高い、仮説2は、妻が非就業の場合就業者と比較して妻が社会活動が多いほど夫の生活満足度が高い、と設定した。

## 第3章 研究方法

### 1. 対象と調査方法

調査対象は、中国上海市に在住し、定年退職した高齢夫婦 136 組 272 人であった(夫婦のうち一人だけ退職した場合も含む)。対象者の抽出は、筆者の親族・友人に対して上記の条件に合致する調査対象者の紹介を依頼する方法で行った。調査方法は、自記式調査票を用いて訪問配布・訪問回収法で行った。回収された調査票は 131 組であった(回収率は 96.3%)。

### 2. 分析項目

#### 1) 独立変数

##### (1) 社会参加

社会参加については、在宅活動および外での活動それぞれの有無と、在宅および外での活動それぞれ 1 つ以上活動している回答者については、在宅および外での活動それぞれの参加頻度を質問した。

##### (2) 就業の有無

就業の有無のダミー変数(1=就業, 0=非就業)を作成した。

## 2) 従属変数

生活満足度については、古谷野ら（1990）によって作成されたにより生活満足度尺度（Life Satisfaction Index Koganei; LSIK）を使用した。

## 3) コントロール変数

主観的健康感、暮らし向きの程度、学歴、年齢を測定した。

## 3. 分析方法

分析は夫と妻それぞれ別々に、重回帰分析を行った。男性の場合、男性の生活満足度への妻の社会参加の効果を分析するため、男性の生活満足度を従属変数、独立変数として、①妻の在宅活動、②妻の外での活動、③妻の在宅活動と妻の外での活動それぞれの夫の就業との交互作用項、さらに、コントロール変数として、①男性の就業、②男性の在宅活動、③男性の外での活動、④男性の主観的健康感、⑤男性の暮らし向き、⑥男性の学歴、⑦男性の年齢をコントロール変数として投入した。

女性の場合、女性の生活満足度への夫の社会参加の効果を分析するため、女性の生活満足度を従属変数、独立変数として①夫の在宅活動、②夫の外での活動、③夫の在宅活動と夫の外での活動それぞれの夫の就業との交互作用項、さらに、コントロール変数として、①女性の就業、②女性の在宅活動、③女性の外での活動、④女性の主観的健康感、⑤女性の暮らし向き、⑥女性の学歴、⑦女性の年齢をコントロール変数として投入した。

## 4. 倫理的配慮

本研究は、桜美林大学研究倫理委員会にて承認済み（承認番号 21034）である。

## 第4章 結果

### 1. 対象者の属性

平均年齢は夫 67.6 歳、妻 64.1 歳であった。平均結婚年数は 38.8 年、家族構成では、夫婦のみの世帯が 61.1% で多数を占めた。就業の経験については、働いたことがある者が夫 100%、妻 99.2% であった。就業については、就業中の夫は 29.8%、妻が 35.9% であった。生活満足度の平均（標準偏差）は夫では 4.8 (1.7)、妻では 5.2 (1.8) であった。

### 2. 配偶者の在宅活動と外での活動が生活満足度に与える影響：重回帰分析の結果

男性の生活満足度については、妻の在宅活動、妻の外での活動、妻の在宅活動と夫の就業の有無との交互作用項、妻の外での活動と夫の就業の有無との交互作用項のいずれも有意な効果がみられなかった。男性の年齢が生活満足度に有意な効果がみられた ( $p < 0.05$ )。

女性の生活満足度については、夫の場合と同じく、夫の在宅活動、夫の外での活動、夫の在宅活動と妻の就業の有無との交互作用項、妻の外での活動と夫の就業の有無との交互作用項のいずれも有意な効果がみられなかった。女性の暮らし向きの状況が生活満足度に有意な効果がみられた ( $p < 0.01$ )。以上の分析の結果は、仮説 1 と仮説 2 のいずれをも支持する結果ではなかった。

## 第5章 考察

本研究においては、2つの仮説のいずれも支持する結果が得られなかった。仮説がなぜ支持されなかったのかについては、主に二つの理由が考えられる。1つ目は日中の社会環境の違いによる高齢者の就業および社会参加の違いである。二つ目は分析対象者の限定されていたことの影響である。

本研究の問題点と今後の研究の方向性については、以下の4点を指摘できる。1つ目は、筆者の個人的なネットワークを通じて分析対象者の選定したことから、分析対象者が限定されたという問題である。居民委員会の名簿を活用し、代表性がある標本を対象とした分析が必要である。2つ目は、夫婦ペアを就業の有無によって4類型に区分し、それぞれの就業以外の社会参加の生活満足度への効果を分析することが必要である。3つ目は、分析モデルに子どもとの関係を位置付けることが必要性ある。4つ目は、社会活動をより細かく分類し、社会活動の種類による結果の違いも検討して見る必要がある。

#### 参考文献

- [1] 李成福・劉鴻雁・梁穎・王暉・李前慧（2018）健康預期壽命國際比較及中國健康預期壽命預測研究．人口學刊，40：5-17.
- [2] 片桐恵子・菅原育子（2007）定年退職者の社会参加活動と夫婦関係—夫の社会参加活動が妻の主観的幸福感に与える効果—．老年社会科学，29(3)：392-402.
- [3] 吳方瑜（1998）老年人心理、社会层面之改变．老年護理学，45-58.
- [4] 袖井孝子・都築佳代（1985）定年退職後夫婦の結婚満足度．社会老年学，22：63-77.
- [5] 崔麗娟（1995）老年人夫妻關係及影響因素的研究．心理科学，18：221-224.
- [6] 小長谷陽子・渡邊智之・小長谷正明（2013）地域在住高齢者の認知機能と社会参加との関連性—社会活動および社会ネットワークを中心として—．日本認知症学会誌，27：81-91.
- [7] 田中博史・菊池宏幸・小田切優子・高宮朋子・福島教照・大谷由美子・井上茂（2018）日本人高齢者の社会参加と身体的虚弱との関連：国民健康・栄養調査を用いた横断研究．東京医科大学雑誌，76(1)：47-56.
- [8] 永井暁子（2005）結婚生活の経過による妻の夫婦関係満足度の変化．季刊家計経済研究，66：76-81
- [9] 胡宏偉・李延宇・張楚・張佳欣（2017）社会活动参与、健康促進与失能預防—基于積極老齡化框架的實証分析．中国人口科学，04.
- [10] 賈玥（2019）性別視角下社会参与对老年人健康影響的研究．首都經濟貿易大学.
- [11] 李蓉（2020）社会活动参与对老年人健康影响研究——基于 CLASS2014 数据．四川省社会科学院.
- [12] 香川幸次郎・中嶋和夫・芳賀博（1998）高齢者の社会活動と生活満足度の關係．日本保健福祉学会誌，5(1)：71-77.
- [13] 高間由美子・杉原利治（2002）高齢者の社会参加と生きがいに関する研究(1)高齢者の社会参加の意義．東海女子短期大学紀要，28：31-38.
- [14] 高間由美子・杉原利治（2003）高齢者の社会参加と生きがいに関する研究(2)高齢者の社会参加の現状と問題点．東海女子短期大学紀要，29：35-44.
- [15] 高間由美子・杉原利治（2003）高齢者の社会参加と生きがいに関する研究：第二報 社会参加を促進する条件整備．一般社団法人日本家政学会研究発表要旨集，55(0)：254-254.
- [16] 高間由美子・杉原利治（2004）高齢者の社会参加と生きがいに関する研究 3 高齢者の社会参加の課題．東海女子短期大学紀要，30：65-75.
- [17] 孫垂（2019）社会参与、孤独感与老年人主观幸福感的關係研究——基于山東省城鄉老年人調查的数据分析．山東大学.
- [18] 余敏慧（2019）老年人社会参与对其幸福感的影響研究．重慶大学.
- [19] 封鉄英・劉蓉・高鑫（2020）人際关系、活动参与与老年人主观幸福感—基于陝西省养老机构調查实例的分析．中州學刊，03.
- [20] 古谷野亘（1990）生活満足度尺度の構造；因子構造の不変性．老年社会科学，12:102-116.

- [21] 伊藤裕子・相良順子 (2010) 中年期から高齢期における夫婦の役割意識——個別化の視点から. 文京学院大学人間学部研究紀要, 12 : 163-176.
- [22] 長田由紀子・長田久雄 (2007) 中高年夫婦の関係性に関する研究——夫婦の就業状況と適応. 日本心理学会第 71 回大会.
- [23] 大須賀洋祐・鄭松伊・金泰浩・大久保善郎・金ウンビ・田中喜代次 (2017) 高齢期における配偶者との運動教室参加が夫婦の関係満足度に及ぼす影響. 体育学研究, 62(1) : 71-81.
- [24] Stinnett, Nick, Janet Collins & James E. Montgomery (1970) Marital need satisfaction of older husbands and wives, *Journal of Marriage and the Family*, 32:428-434.
- [25] 田中真理・鹿鎌田晶子・秋山美栄子 (2018) 高齢期の家事行動と夫婦関係が主観的 well-being に与える影響——配偶者役割の意味づけを媒介として——. 高齢者のケアと行動科学, 23 : 22-34.